

『ロシアにおける反ユダヤ pogrom 史のための資料集』(1)

黒川知文

社会科教育講座

The Materials for the History of Anti-Jewish Pogroms in Russia (1)

Tomobumi KUROKAWA

Department of Social Studies (History), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

本稿は、ロシア革命後の1923年にモスクワとペトログラードにおいて出版された *Материалы для истории антиеврейских погромов в России* のロシア語からの翻訳とその分析より成る。Г. Я. クラスヌイ = アドモニ (Красны = Адмони) が編集したこの『資料集』は、国立出版局によりペトログラード市のアレクセーエフ国立学術実務学校印刷所において1000部印刷された。本文528頁に付録が付いて540頁にも及ぶ膨大な量の資料集である。これは、1881年4月15日から翌年2月29日まで南ロシアにおいて発生した pogrom を扱った同時代の貴重な公的一次史料である。表題は原文に即しており、原注は文末にまとめて提示した。

はじめに

1919年に、『ロシアにおける反ユダヤ pogrom 史のための資料集』の第一版を出版した時に、編集部は、次の点を指摘した。すなわち、「記録保管所の状態により、現時点では、資料の年代順の出版を開始することはできないということ」、また、「それゆえに、キシニョフの pogrom と、ある部分キシニョフと関連のあるドゥボサルスキーの(儀式主義的な)問題を扱った第一巻は、いわば、挿話的な[つまり、非体系的な]性格を帯びている」ということである。現在、ペトログラードの記録保管所の状態が整ったため、これらの資料を年代順に整理し、出版することができるようになり、この巻から実行されている。

編集部が、『資料集』の年代順の出版を80年代の pogrom から始めているのは、過去40年間のロシアの歴史において、この時期にはじめて、 pogrom が、旧体制の内政において明確な要素となり、ほとんど合則的とも言える現象になった、と考えられるからである¹。

さらに、ロシアのユダヤ人の生活において明らかに歴史的転機となった、まさにこの時から、政治的社会的活動の全領域において彼らを標的とした残忍な迫害の季節が始まったのである。ロシア国家の生活において、火と血に彩られた迫害は、文字通り日常的な出来

事となり、それに伴って、全国に精神的な抑圧が広がった。この抑圧の時期に光をあてることは、疑いもなく、未来の歴史家にとって、非常に大きな関心事となるであろう。

本巻は、二つの部分から成っている。第一部は、地方当局に夜中央政府への迫害に関する報告書と、コレラの報告書の内容を巡って交わされた通信文である。報告書と通信文の日付は、1881年4月15日(エリサヴェトグラードの pogrom) から同年9月までで、この期間に、80年代において最も重要な pogrom が起こったのである²。

第二部は、伯爵 П. И. クタイソフが内務大臣に当てて書いた報告メモである。報告メモの日付と内容は、第一部の報告書のそれと同じである。クタイソフ伯爵は、 pogrom の原因と性格を明らかにするために、事件が発生した県に派遣された。これらの報告メモの存在については、前から知られていたものの、政治局の公文書保管所への立ち入りが困難であったことから、誰も利用できなかった。現在まで歴史家は誰もそれを自由に読むことがまったくできなかったのである。今日、それが手に入り、公表されるようになったために、さらにもう一つの——しかも、非常に興味深い——可能性が出てきたのである。すなわち、体制の内政におけるほとんど恒久的な要素としての pogrom を生み出したまさにその時代をより深く理解できるようになっただけでなく、この体制が動かしていた内部機構に対しても、より深い洞察を加えることができるようになったのである。

クタイソフの報告メモは、国のすぐれた役人が内務大臣に当てて書いた単なる報告書というだけではなく、すぐれた高級官僚がいわゆるヨーロッパ問題に関してどのような政治的イデオロギー——当時的高级官僚の世界にとってある程度典型的とも言えるイデオロギー——を持っていたかを明らかにするものでもあった。後で見るように、ユダヤ人についてということであれば、このイデオロギーには、悪意はまったく含まれていない。20世紀初頭以降、ロシアの官僚と統治者

のグループ一般のユダヤ問題に対して、悪意は含まれていないのである。しかし、ロシアの人民を前にして自分の罪を認めず、人民の最も真実で最も現実的な必要を無視し、この問題における自分自身の罪をユダヤ人に押しつける傾向がすでに顕著かつ強固になりつつあった。人民は土地を持たず、飢餓がロシアの南部全体を襲っていた。人民の間では動揺と地方政府に対する不満が広がり、その結果、ロシアのあちらこちらを、様々な規模のボグロムの炎がなめつくした。一方、当局は、人々の怒りを静めるために、「これは、ユダヤ人の経済的優位と支配のせいだ」と説明した。昔からの「知恵」は、ロシアに次のように語りかけた。ボグロムを根絶し、反乱を起こした民衆の激情を鎮めるためには、ユダヤ人の経済力を無力化し、彼らを農民の経済レベルに引きずり落とすだけで十分だ、と。しかし、当局のうちの誰も（または、ほとんど誰も）、「農民の経済力をユダヤ人の経済力の水準にまで引き上げ、この水準に達したら、彼らを健全かつ有益な競争に委ねることによって、ロシアを実質的に勝利に導く」という方法を思いつかなかった。

クタイソフは、第一の見解を持つ論者であった。この視点は報告メモのいたる所で示されており、中央は、それを最後の手段として歓迎した。中央では、怒りと敵意を抱く国民に対してそのような説明が見付かったことを喜んでいた。当局がすべての責任から逃れられるかもしれないからだ。インガチエフ伯爵のユダヤ政策を示唆したのは、まさにクタイソフ自身であると、ほとんど確実な事実として言えるのである。この政策に基づいて、まず「有名な」ユダヤ問題県委員会が作られ、その後1882年、それに勝るとも劣らず有名な「規則」が制定された。この規則は、ほぼ40年にわたって、無数の権利を市民から奪い去ったのである。まさにこの視点から、クタイソフの報告メモは、特別な意味と役割を持つようになり、その公表は、疑いもなく、最も重要な歴史的意味を持つ出来事となったのである。

本巻のすべての資料は、旧政治局記録保管所から得られたものであり、原文のまま印刷されている。まったく重要性のないものか、重複している部分を除き、すべてが掲載されている。文体や正書法は、原文とおりである。ただ、句読点が挿入されているが、これは、大多数の場合、意味をはっきりさせるためである。例えば、時折、明かに意図的に間違いだらけにしてある宣伝ビラの文章の中とか。推敲不足によって欠落したことが明かな言葉を挿入したことも時々あった。このような場合、これらの言葉は、括弧に入れられ、疑問符が添えられている。

読者もお分りのとおり、報告資料だけは、ある程度まで年代順に並べられている。クタイソフの報告メモは、時系列的に見れば、かなり無秩序に並んでいる

が、原資料とはそもそもそのようなものである。当初、編集部は、読者の便宜をはかって、この資料も年代順に並べようとしたが、後で、この魅惑的だが危険な考えを捨てて、あらゆる非難を回避するために、記録保管用資料をそのままの状態を提供した方がよいという考えに変更した。報告書や報告メモの中に記されているすべての統計資料は、便宜上追加されたものである。統計資料は、本書において、紙面を節約するためと、見やすくするために、幾分修正が施されている³。

本巻が日の目を見ることができたのは、次の二人の協力のおかげである。すなわち、御自分の時間を利用して、資料の収集に協力してくださったアカデミーセンターペトログラード支部長M・P・クリスチと、印刷を行い、しかも費用も負担してくださった国立出版局ペトログラード支部長I・I・イワノフである。二人は、どちらも、ロシアの史料編集にとって、詳しい資料を収集し、公表することがいかに必要不可欠で重要なことかを同じくらい理解しておられる⁴。もし第二巻において、これらの資料の出版が中止されてしまうならば、大変悲しむべきことである。しかし、残念なことに、このような事態に陥る危険性は、疑いようもないほど確かに存在するのである。国が特別学術委員会（もしくは、協会）に対して援助金の支払いを拒否するならば、資料の出版事業はその場で頓挫してしまうだろう…。

編者記す

旧体制とユダヤ人ボグロム⁵

1881年の春に始まり1884年の夏になるまで続いた80年代のボグロムには、すべての歴史現象と同様に、独自の理由と、独自の原因があった。しかし、このボグロムの時期から丸々40年が過ぎたにもかかわらず、本当の原因は今日にいたるまでまだ明らかにされておらず、これらの出来事は実際のところ、あたかも次のような印象を与えるのである。すなわち、「ボグロムは、ユダヤ人に対する何らかの自然発生的な〔感情の〕爆発の結果でしかなかった。当時の政権の意見によれば、国内経済を巡って、ユダヤ人と昔からの住民との間にあったと言われる反感が引き起こした突発的な出来事でしかなかった」と。もちろん、ユダヤ人にとって不快きわまりないこの解釈は、権力にとっては非常に好都合であった。なぜならば、この解釈を採用すれば、世間の評判や、ロシア、そして、西欧諸国の前で、似たような「自然発生的な爆発」に対する責任を全く負わなくて済むようになるからである。しかし、現在、客観的な歴史学は、様々な事件を総計するだけではなく、それらのすべての側面をより深く掘り下げて研究し、光を当てることができるのである。歴史学は、すべての原因やすべての力、類似した事件を考慮しなければならない。また、歴史学は、科学であることを主

張する以上、対象がどのようなものであっても、そこに真理を見つけなければならないのである。この真理は、ユダヤ人のボグロムのようなまさに「忌まわしい」現象において、とりわけ重要である。というのも、ボグロムは、常に、旧体制にとって、「抑圧」だけではなく自己弁護のためにも利用された、最も強力かつ恐ろしい武器の一つであったからだ。ボグロムは、国家——国家の存在を脅かしているのはユダヤ人だけであるとされていた——保全の美名の下に死と破壊を広めるために利用された。たしかに、ロシアのユダヤ人にとって悲劇的なこのような事実の探求と発見の過程は、長くて複雑である。それは、この40年間にあまりにも多様で多面的な時代であったからだ。この40年間に、80年代からユダヤ人ボグロムが起こったのだ。しかし、この時期は、発見されなければ「ならない」。さもないと、この40年間についての、正確で客観的なロシア史はけっして記されることはないのだ。そう、文字どおりロシアの歴史なのである。ロシアのユダヤ人の歴史だけではない。なぜならば、この期間における、ロシア国内政治全体と、いわゆるユダヤ人問題との間には緊密な関係があったことが、あらゆる公平な研究者に、すでにかなり明らかになっていたのである。

実際、この国内政治において、一瞬でも、国家存在の政治的側面と関わりを持たず、ロシアのユダヤ人に対して顕著な（そして、ときどきのことだが、格別な）関心が寄せられなかった時期を見つけだすことは難しいのである。ロシアの国家機構の動きと働きのあらゆる部分に、ユダヤ人が存在したので、旧権力は、「ユダヤ人」を「顧みない」という目的に向かって、政治的、社会的、経済的な領域において、ある程度真剣な第一歩を踏み出す、ということがほとんどできなかった。奇妙なことに、すべての問題はまず、当局に対して、「ユダヤ的」側面を見せていた。それゆえ、当局が、すべての政策において、ユダヤ人やユダヤ民族に多くの「注意」を払ったとしても驚くに値しないのだ。過去40年の注意深い研究の結果、「革命前の旧ロシアにおいて、実のところ、ユダヤ問題は存在しなかった。しかし、国政のすべての分野を包み込み、巨大な国家機構の全ての時代を埋め尽くしたロシアのユダヤ人問題はきわめて重要な事柄であった」という事を堅く信じるようになった。この「ユダヤ人問題」によって次第に汚染されながら、国家機構は、ますます頻繁に故障を起こし、正常な国家建設の道程からますます大きく逸れるようになり、ついに、その指導者たちによって掘られた深い穴の中に落ち込むことになるのである。だからこそ、この巨大な「ロシアのユダヤ人問題」の一部としてのユダヤ人ボグロムも、もっぱらロシアの歴史全体との関わりの中で、また、もっぱらロシア全体の政治を背景として、調べることができるし、ま

た、調べなければならないのである。

1881年春から3年以上続いたボグロムの恐るべき時期を呼び起こした理由はいかかのものであった。

ロシア法の有名な歴史家であり、ロシアユダヤ人の時事評論家でもあるオルシャンスキーは、ボグロムが起こるずっと前、70年代の初めに、すでに、次のことに気づいていた。すなわち、「農民解放は、ユダヤ人の生活習慣との間に目に見える直接的な関係を持っていなかったが、実際、それに対する強い影響を明らかにしたし、また、明らかにし続けているのである」と⁶。オルシャンスキーが、この場合、言おうとしているのは、農民解放が、もっぱらロシアにおけるユダヤ人の経済状態に与えた影響についてである。しかし、80年代のボグロムの原因に関する最近の研究によって、農民解放がこれらのボグロムとの間にも密接な関係を持っていたことが疑いもない事実として明らかにされつつあるのである。

80年代のボグロムにおいて、誰が破壊し、殺害したのか。農民——農夫と農民——労働者である。しかし、彼らはいずれもこれを無意識に行ったのであり、彼らの意思と理性は働いていなかった。当時のロシアをすっかり覆い尽くした血の色をした悪夢の雲の中で、このドラマの主演である農民（農夫と農民）、労働者は、「なぜユダヤ人の財産を破壊し、彼らの血を流したか」をもっとも理解していなかったのである。しかし、彼らは一つのことはよく知っていた。それは、彼ら自身にとって恐ろしく、真っ暗な闇に包まれた出来事であった。浴びるようにウォッカを飲み、泥酔状態の中で、彼らは、心の中に燃えていた不満や、怒り、悲しみの炎を、他人の血によって消したのである。農民たちが「自由」の身になり、「束縛されない」状態に導かれ、歴史の広い場所に解放放たれてから20年が経過した。この20年が終わりに近づく頃になると、彼らは、自分たちがいかにも貧しいことに気が付いたのである。地主のもとにいた頃よりも貧しいというわけではないが、やはり自分たちが惨めな状態にあることを悟ったのである。「自由」ではあるが、無慈悲な20年にわたる労働の日々は、彼らにとっていたずらに過ぎ去った。後に残ったものは何もなかった。彼らは相変わらず裸で、貧しく、未来は、過去と同じように暗かった。

1881年は、いわゆる「大改革時代」を総計する年であった。それは、この年の3月1日に、この時代と密接に結びつく解放者皇帝が殺されたからではなく、この頃までに、「大改革時代」は、すでにその完全な姿を現し、すべてを出し尽くして、枯渇していたからである。1861年2月19日から始まる20年間は、この期間にロシアにおいて形成されたあらゆる政治的、経済的、社会的要素に関して機械的な総括を行っただけではない。農民解放令が布告され、この解放によっても

たらされた好機から、どのような歴史的論理的結果が生まれたのかをも、明らかにしたのである。この年は、農民解放令の最後の年であり、時計で言えば夜の12時を告げる時であった。そのため、農民解放令がどのような力を持っていたのかすべて明らかにすべき時だったのである。肯定的な力、否定的な力、そのすべての有益な傾向と破壊的な傾向がもたらした結果が明らかにされなければならなかった。もし、20年経って「改革によって恩恵を受けたはずの農民たちが、欠乏や飢え、土地不足から、ユダヤ人を殺し、強奪し、彼らの苦しみの上に自分の豊かさを築き上げざるを得なかった」ということが明らかになったとするならば、十分言い尽くされていない部分や中途半端に終わった部分が、改革そのものの中にもあまりにも多く隠れていたのははっきりしているのである。

1861年の農民解放令は、農民の問題を、完全に、しかも、公平に解決することができないということは、それが公表された直後からすでに、公平な判断をするあらゆる人々の目には明らかであった。市民に共通する権利という点において、農民は自由な市民であるとも、また、自分の以前の地主と平等であるとも見なされなかったということは言うに及ばず、農民は、経済面においても、自分の直接の利益という点において、改革から何も得ることができなかった。2月19日の法律は、新しい「市民」——無産農民——を広々とした自立の道へ導き出した。たしかに、農民は土地つきで解放されたが、財産はまったくなく、分与されたものは微々たるものであり、非黒土地帯においては $3 + 1/4$ から8デシャチーナまで、黒土地帯では3から $4 + 1/2$ まで、ステップ地帯では $6 + 1/2$ から12までの間であった。しかも、その後、これらの分配は、さらに削減の憂き目を見たのである。もちろん、このようなわずかな分配では、平均的な農民の家庭に満足を与えることはできず、どんなに貧しい家庭の収入をも満たさなかった。これは、(農民の)既存の労働力の半分しか吸収できず、そのため、彼らの生活を保障することはできず、彼らに課せられた義務を完全に果させることも不可能であった⁷。農民を苦しめ、その家計を圧迫した義務のうちで、年貢は最も重要なものであった。農民のすべての労働は自分の割り当て地の耕作に費やされていた。年貢は農民が精いっぱい働いて、やっと支払える程度の額に設定されていた。さらに、国家地税と地方地税、解放農地代金支払金、森林税等から成る地税や、人頭税、賦役等々が課せられた。70年代に、中程度の農家に課せられた税金は、年間で約30ルーブリであり、平均的な農民の収入には絶対に支払えない額であった。解放農地代金支払政策は、そもそも、土地を農民の手に円満に引き渡すことを目的としていたのだが、その政策自体が、農民の状態を混乱に陥れていったのである。この政策によって、農民

が地主の言いなりになってしまったいくつかのケースが知られている。地主は、分配地をぞんざいに切り分けた(例えば、耕作している時に、彼の放牧地や牧場を奪い、牧場の世話をしている時に耕作地を奪ったり)ので、最後の分配地は量的に小さくなっただけではなく、質的にも悪化し、何の役にも立たない土地になってしまった。この政策は、農民たちを袋小路に追い込み、地主に完全に経済的に依存せざるを得ない状態に陥れた。彼らは、どんな条件でもよいから、地主から必要な分地(用地)を借りざるを得ない状況になった。

特にこの話は、南の黒土地帯の県でよく報告された。農民たちは、最初から微々たる分配しか受けられなかった。彼らは、地主の下で労働者として働くか、もしくは土地を賃借りするしかなかった。どんなにひどい条件でもそうせざるを得なかったのだ。70年代の終わり近くに、農民が借りていた土地は(80年の反ユダヤ pogrom の発生地として我々の興味を特に引く)南部の県だけで、約1200万デシャチンであり、これは、全ヨーロッパロシアにおける地主所有農民への分与地として数えられていた土地総面積のほぼ3分の1にあたる⁸。この賃借の条件が、どのくらい厳しくて、ときに耐え難いものですらあったかは、当地において、給料とパンの価格の上昇率が100パーセントよりも大きくなることがなかった時に、借地料は、300パーセントから400パーセントまでになった(つまり、3倍から4倍に値上げされた)という事実からも明かである⁹。農民の側の状況改善の試みは、すべて、開始点から挫折した。彼らを苦しめていた経済的圧迫があまりにも大きすぎ、また、彼らの個人的な市民的権利や経済的資源があまりにも小さすぎて、これらの圧迫と戦うことができなかったのである。すでに70年代の終わり頃に、農民の土地所有に関して、次の図が描かれていた。すなわち、45パーセントの農民は、明らかに不十分な土地を所有。43.5パーセントは、平均的な分配を受け、何不自由なく、きちんと整った生活をしていた人は、たったの14.5パーセントであった¹⁰。さらに、70年代の終わりに、「80年代で最も激しいポグロムが起こったまさにその南部の県において、1861年の農民解放令以前に農民たちが利用していた土地の面積は、彼らが農奴制の依存関係から解放されてから20年を経過した70年代の終わりよりもはるかに大きかった」ということが明らかになったのである。エカチェリノスラフ県では、かつて地主所有の農奴であった農民によって、1861年前に使用されていた土地は535,500デシャチンであったが、1871年から78年のデータによれば、すでに分配地は合計334,600デシャチンになっていた。ポルタヴァ県では、806,100-505,100デシャチン、タヴリダ県は108,100-83,200デシャチン、ハリコフ県では638,900-457,800、ヘルソン県は522,600-451,100、チェルニゴフ県は

954, 900-747, 100デシャーチンであった。これらの県の中で例外は、ヴォルインスク県の1, 205, 800-1639, 700とキエフ県の1, 072, 300-1, 426, 800とポドリスク県の639, 600-1, 216, 500だけであった¹¹。

このようにして、かつて地主所有農民であった（とくに南方の）人々が自分の自由にできる土地として受け取ったものは、農民解放後、それ以前よりもかなり小さくなってしまったのである。たしかに、分与された農場は、地主の保護と鞭から自由になり、自分の裁量に委ねられたのであるが、それを開発するための資源は一切奪われていたので、状態は、地主のもとにいた時よりも悪い時のほうが悪化したのである。そして、実際、農民解放後すぐに、農家に古くからある慢性的な病「土地不足」が報告された。この病は1917年まで続いた。この土地不足の問題は、農民の人口増加に伴って激化し、また、人口増加は、まず農家の貧しい家計を苦しめる結果となった。農民が労働を、地主や、当時、地主と並ぶほどの勢力として台頭していた工場主にただ同然で提供するようになったのはこのためなのである。「自由な奴隷」として彼らに自分を身売りしたのはこのためなのである。どんな方法であっても、ただわずかな必要を満たすことができさえすれば、と言って、彼らは身売りしたのである。しかし、これすらも彼らを現地で救うことにはならなかった。土地は少なく、しかも、多産な土地ばかりではなかった（とくに、北方においてそうだった。中央地帯でもやせた土地が部分的にあった）。耕作の方法はほとんど原始的であり、地方にはその他の仕事が多くなかったため、大勢の農民が仕事を求めて田舎から都市（主に、ステップ地方の県）に向かって流れ出した。他の場所で仕事を探す必要性は、来る年も来る年も増大していった。我々の関心を引く20年間に、農民たちの間でこれがどのように拡大していったかは、次のことから明らかになる。すなわち、1861-1870年の10年間に交付された農民のパスポートの数が約12, 913, 000であったのに対して、1871-1880年の10年間は36, 929, 000であり、約3倍の増加であった¹²。

こうして貧しい農民のロシア人たちは住み慣れた場所から動きだし、放浪を始めたのである。彼らは、巨大な灰色の波のごとく、北方や中央の県から、南のステップ地帯、豊かな大都市に、仕事を求めて流れて行ったのである。彼らは、村では日雇い農夫として、都市の重工業や軽工業の工場では労働者として働いた。毎年、波が次々と押し寄せていった。南に押し寄せる農民の数が増えれば増えるほど、これらの半分市民で半分放浪者である人々の生活はますます厳しさを増したのである。一日18時間の畑での重労働は、軽工業や重工業の工場におけるそれと同じくらい厳しいものであった。労働条件やあらゆる労働環境は、人の精神を墮落させ、その心をいらだたせた¹³。

いらだち、ほろをまとい、飢えたこれらの農民たちは、ロシアの南方をさまよい歩き、仕事を探し、故郷よりもっとましな生活を求めて、方々を渡り歩いた。いくらか安定した仕事によりやく就けた人間は少なく、大多数は、そのような仕事がなく、鉄道の駅や、海や川の波止場、大小の都市の市場で、ありとあらゆる「雑役」をこなした。その主な仕事は、貨車や汽船などの荷おろしに際して、重い荷物を運搬することであった。これらの農民たちは、一般に、パスポートには、北方や中央のロシアの村の住民として記載されていた。彼らこそ、ここ南方において、「野次馬」となった人々なのである。この巻において、キエフやオデッサなどの都市からの公式報告書のすべてが彼らについて触れている。彼らこそ、ユダヤ人から略奪し、彼らを殺害したのである¹⁴。

これらの、腹を空かせ、それゆえにいらだちをかかえた群衆の状態は、80年の終わりから81年の初めにかけて、悪化した。それは、その頃、主にロシアの東と南に飢饉が起こり、パンの値段が急騰したからである。

1881年から84年にボグロムが起こった県におけるパンの価格上昇は次の通りである¹⁵。

県	1879年	1880年	1881年
ヘルソン	78k.p.	1 r. 14k.p.	1 r. 24k.p.
エカチェリノスラフ	75k.p.	1 r. 09k.p.	1 r. 29k.p.
タヴリーダ	99k.p.	1 r. 38k.p.	1 r. 69k.p.
ドン州	75k.p.	1 r. 09k.p.	1 r. 29k.p.
キエフ	79k.p.	1 r. 19k.p.	1 r. 27k.p.
ポドリスク	92k.p.	1 r. 20k.p.	1 r. 32k.p.
ヴォルニニヤ	99k.p.	1 r. 29k.p.	1 r. 31k.p.
ハリコフ	65k.p.	1 r. 20k.p.	1 r. 27k.p.
ポルタヴァ	61k.p.	1 r. 09k.p.	1 r. 12k.p.
チェルニゴフ	69k.p.	1 r. 25k.p.	1 r. 29k.p. ²

[訳者：1 ブード当たり。r はルーブリ、k.p. はコペイカを示す]

最も主要な食糧であるパンの、当時にとって異常な価格の高騰が、一般大衆にどのような心理的な（物質的ではない）影響があったのかを理解するためには、次のことを示すだけで十分であろう。すなわち、例えば、チェルニゴフ県では、1881年にライ麦粉1ブードは1ルーブリ29コペイカしたが、これは、1879年の価格のほぼ100パーセントの上昇である。1865・67年のライ麦1ブードの価格は5コペイカで、からす麦1チュトヴェルチ（すなわち10ブード）は40コペイカであった¹⁶。実際に、このようなパン価の高騰は、最も強く、また、まず第一に、農村に影響を与えずにはおれなかった。農村は、このような高騰と無縁の豊作年であっても、みじめな生活を送らなければならないの

に、今度は移民たちの波が、彼らに特別の影響を与えざるを得なかったのである。事実、80年に、お金を稼ごうとする農民たちによる、農村から都市への未曾有の脱出の徴候が見られた。人々をパニック状態に陥れた農民の都市へのこの脱出が及ぼした影響の大きさは、ある布告の中に読みとることができる。ハリコフ県に公示され、1881年の夏に発せられたことが確実なこの布告の中において、この現象はすでにしっかりと確立されていた「当たり前の出来事」として描かれているのである。布告では、「飢えと寒さに苦しむ人々が都市を目指した。軽工場と重工場は労働者で一杯になった。町は住み難くなった。…」¹⁷と記されている。しかし、受け入れ準備ができていない都市に脱出したとしても、「どうしたら救われるのか？」という、脱出者にとって苦しい質問への答えは得られなかった。都市は、南部においても、まだ産業の組織化と建設の時期に入ったばかりで、それらの圧倒的大多数の都市の産業は、まだ貧弱で、遅れていた。そのため、当然のことながら、避難民の集団が全て軽工場や重工場に吸収されるわけもなく、どんな安い賃金の仕事も見付からないため、彼らにとっては一難去ってまた一難の状況であった。政府の援助はなかった。社会事業家はまったく存在せず、避難農民の集団の流れを整理し、彼らの住環境を整えるために、何らかの手を打つ準備ができていた政府の行政機関は一つだけ存在した。居心地のよい故郷から運命的な力でもぎ取られ、新しい町の生活の中に放り込まれ、自分の田舎（より酷いとは言えないまでも）と変わらぬほどの飢えに苦しむ、仕事のない農民たちは、政府から捨てられ、運命の波に弄ばれていた。彼らを支える者は誰もなく、納得のいく行政の指導も受けられなかった。間もなく、彼らは、町のならず者になり、市民にとってばかりか、当局にとっても脅威となった。当時、飢えが招いた恐ろしい犯罪がロシアの都市において急速に増加した¹⁸。80年から81年にかけての犯罪記事欄は、飢えと宿無しが引き起こした異常な犯罪にちりばめられていた。オデッサでは、（いわゆる「野次馬」に属する）「貧民」が、白昼に歩道の端に設置された台石を勝手に転がして持って行こうとした。捕まって法廷に引っ立てられると彼らは「腹が減っていた。牢屋に入りたかった」と申し開きをするのであった¹⁹。ハリコフでは、健康で強壮な人々が、もっぱら牢屋に入るためにのみ、盗みを働いたのである。彼らは、冬の間、雨露をしのぎ、食べ物にありつけるならどんな場所でもいい、と考えていたのである²⁰。社長シェルビーナは、1880年の『キエフ人』の中で、「浮浪者たち」が身を寄せる巢窟の悪夢のような光景を描いてみせた。彼らは、これらの根城から離れようとしなかった。離れなければならないとしたら、それは、唯一死ぬ時だけであった。というのも、これらは、まがりなりにも彼らに居場所とい

うものを与えたからである²¹。81年の初め頃にロシアを覆った貧民と強盗の巨大な波があまりにも大きく、貧民の数があまりにも多すぎ、ロシアの町や村において暴力があまりにも頻繁に起こったため、シベリヤから始まった似たような慢性的な状態は、「包囲」と呼ばれ、ロシアの中でも飽食で恵まれた地域は、包囲された陣営と化したのである。しかし、悪意のない人々やプロレタリア的ではない怒りは、当時、飢えた人々を食べ飽きさせ、無宿者を豊かにした。飢えた皇帝自身が、国内政治の舵取りを政府の萎えた手から奪い取ったのである。皇帝は、飢餓という毒でもってロシアを殺し、ロシアを、丸3年の間、血と炎が燃え盛る奈落の底につき落とした。ぼろぼろの上着を着、飢えというズボンをはいた悲しみと幸薄き人々は、あてもなくロシアをさまよい歩き、真っ暗な闇の中を絶望にかられて、誰か犠牲になる者はいないか、八つ当たりできる者はいないかと探し回っていた。

前述の刑事事件問題解説者は、この貧民たちの絶望的で出口のない状態を、このように幾分修辭法的に描いたのである。「ロシアを放浪する悲しみと不幸からすべての貧民や、ぼろをまとい、パスポートを持たず、ロシアの町々にうごめき、道路を埋め尽くし、様々な波止場や群衆の中に隠れ、そこで死に果てる貧乏人を救い、かくまう王はどこにいるのか。そのような王はいないのか。飢えた人々を収容する居場所や安らぎの場はないのか。獣にだって、穴があり、巣があるのに、時々野生化するこれらの人間の屑たちにとって、祖国には空気と光のほか何もないのだ。シベリヤの牢屋に入り、かかる条件である程度の重労働の刑に服したいという激しい欲求があることが理解できるようになった。」²²

疲れきった心にとって、シベリヤや重労働や牢獄が唯一の願いになるような状態、自分の腹の中のそのような状態が、恐ろしい嵐や雷雨を運んだのは明かである。これらは起こるべくして起こったのである。

ロシアを回避不可能な破局に引き入れた経済的な原因は以上の通りである。何百万もの巨大な群衆を呻吟させるような経済的な圧迫が、何のとがめもなくまかり通るような例を、歴史はそれまで体験したことがなかった。常に不満を抱え、常に何か飢え渴いている大衆の心の中で絶えずくすぶり続ける小さな炎を甘く見てはならない。過ぎ去った20年は、アレクサンドル2世の政府がとったすべての政策が大衆や多様なインテリゲンチヤにとって受け入れがたいものであることを示していた。それは単に、その政策が打算的で、地主や会社の設立者たちの利益にしか奉仕しなかったというだけではなく、民衆に何一つ与えなかったにもかかわらず、あたかも彼らへの愛情を持つ者であるかのように振る舞おうとしたためであった。民衆は、この20年間に受けた打ち傷と切り傷のすべてを自分の体に感

じとっていたが、その弱い識別力のゆえに、この苦しさの責任は一体誰にあるのか、ということが理解できなかった。

この責任者を明らかにしようとした2つの力——人民主義の力と、地主・官僚階級の力——の中で、人民主義は、初めから、この点に関して自分がまったく無力であることを感じ、すぐに自分の敵に譲歩してしまった。

周知のとおり、ナロードニキの計画——「人民の中へ」——が、ロシアの労働農民の経済状態の極度の重圧の下で確立された。この状態は、70年代の初頭にすでに多くの人々にとってあまりにも耐えきれないものとなっていたので、結果として、第一の革命的呼びかけの下で、農民の集団蜂起が現れざるを得ない状況であった。この蜂起が間近に迫っていることを確信していた『前進』は1874年に次のように書いた。「ロシアの全土に行け。町や村、工場やタベの集いに行け……。行って、誇張せず、飾らずに語れ……。事実を語るだけで十分だ。事実そのものが自らを弁護するのだ……。種を蒔け…そうすれば熟して実がなるだろう。救いが来、報いが現れるだろう」しかし、これは、虚しい期待であった。人民の生活の低い場所にまで降りていった熱狂的なロードニキの集団は、すぐに「人民は、少数者を除いて、我々の福音に耳を貸さず、我々を理解せず、…そしてこれが我々にとってもっとも恐るべきことであるのだが…理解しようとしなさい」ということに気づいたのである。人民は、暗く、無学で、教会の強い影響の下にあり、皇帝の手先である官吏や地主たちに隷従し、献身的に仕えていた。そのような状態であるから、当然のごとく、彼らはナロードニキの福音を拒み、彼らにとって唯一の身近な権力であり、自分自身気づいていない束縛の力に対して蜂起しようと呼びかける彼らの促しにも首を縦に振らなかった。このように、ナロードニキと人民の間には相互理解が全く欠けていたのである。そのヒロイズムと熱情も虚しく、ナロードニキは、この耳を閉ざした無学な不信の民の前から身を引き、彼らを自らの運命に委ねる以外になかったのである。しかし、大衆の政治的保守性の前に降伏した後も、彼らは、この巨大な潜在的革命力を利用できるという堅い信念を隠し持っていた。人民は、違った目的のために奮い立たせられ、その憎しみと敵意が沸点に達する時に、巧みな戦略により、彼らの本当の敵——専制的帝政——に立ち向かうことも可能だと考えていたのである²³。

このようにして、しばらくの間、人民は、ロシアにおいて政治的・経済的に組織化された唯一の勢力であり、当時、農民経済の旧体制から資本主義の新体制への移行過程にあった地主・官僚階級の手の中にあることが明らかになった。

60年代と70年代、そして80年代の一時期は、ロシア

史における経済的新時代と呼ばれている。経済力全体において未曾有の進展が見られ、軽工場や重工場の建設ラッシュ、鉄道や舗装道路の建設、国内取引だけではなく海外との輸出入貿易も進展した。解放された農民たちは、安価な労働力を提供し、国内の天然資源が無尽蔵に現れ、資本主義の繁栄により西欧の金融市場において下落した外国資本が、ロシアを約束の地とみなして押し寄せた。これらの巨大な可能性に基づいて、産業と貿易が開き始めたのは驚くには値しない。経済の確立という点において、このような短期間（20・25年）でこのように大業を成し遂げた国はヨーロッパには他に見あたらなかった²⁴。農奴制の束縛から解放された自らの活発な力を総動員して、ロシアは、急発進し……、そして、ユダヤ人と出くわした。両者の道が交差したのは、歴史の意思によるのである。しかし、新しいロシアの創造の熱情をすべて注ぎ込み、自らの知性と才能のすべての力を出し切った後に、ロシアは、そのお返しに、雷鳴のような叫び声と打撃を受け、10年の間、この打撃から立ちなおることができなかった……。

このようにして、大規模な経済的建設という新しい道の上で、かつて地主であった者や庶民的知識人からなるロシアの貿易・産業を担う階級は、この建設に参加することを望んでいたユダヤ人も出くわしたのである。ユダヤ人は、自分の新たな役割を果たすことによって、ロシアにとって有益な者になれるという実力と可能性を自ら感じていた。彼らの性格は、活発で柔軟性に富み、国家規模の経済の様々な分野における組織や財政の入り組んだ問題（例えば、鉄道建設、軽工業や重工業など）から、供給者と需要家の間の小さな仲介業務に至るまで、あらゆる複雑な問題に対処できる能力があった。彼らは至る所に現れ、新しい経済機構が関与するあらゆる分野に登場し始めた。しかし、ユダヤ人がヨーロッパやロシアにおける自らの豊かな経験を背景に、商業や産業に対して才能を発揮し、ロシア経済における新しい環境を、あたかも生まれ故郷にいるかのような快適な場と感じ取っていたのに対して、ロシアの地主や庶民的知識人（最近のロシアブルジョアの先祖）は、新しい環境にすぐには適応できなかったのである。適応できたとしても、これらの目新しい生活条件には、少しずつ「用心しながら」慣れていったのである。この新しい環境は、大胆さや決断力を要求する場であり、何よりもまず危険が前面に現れ、万事を決定する。臆病な地主や、新しい経済的関係に対して恐れを抱く庶民知識人たちは、その小心さのゆえに、新しい生活に対するこの激しい意欲の高まりを鎮めてしまったのである。もしこの熱意が殺されずに、逆に、このような西欧ですら体験したことがなかった経済の形態をロシアが受け入れたとするならば、それは、ユダヤ人がこの時ロシアの運命に参加し

たからにはほかならない。しかし、ロシア経済という名の船に乗り込み、その中の最も人目につかない小さな仕事にでも就くためには、ユダヤ人は、幾千もの障害を乗り越え、きわめて非人間的な幾千もの法律をくぐり抜けなければならなかったのである。これらの法律は、ユダヤ人の翼をぼろぼろにし、彼らを窒息させるために、体制によって制定された。このような状況の故に、ロシアの経済的地位の内部にまで入り込むのは、彼らにとって特に苦しい過程であり、その時に受ける傷は、きわめて悲惨なものであるが、それでもなお、彼らの前には避けて通ることのできない問題が立ちだかっていた。それは、「生きるべきか死ぬべきか」という問題であり、幾千もの策をろうしてでも生き延びるべきか、それとも、「ユダヤ人定住地域」という恐ろしい万力によって締めあげられて死ぬべきか、という問題である。結局、生命保存の本能が勝利した。70年代の初めにすでに、ユダヤ人がロシア経済において果たしていた役割は顕著であった。南西部地方において、ユダヤ人が全人口に占める割合は、約15パーセントであり、その地方の全領地の6分の1がユダヤ人によって賃貸借利用されており、27の砂糖工場（これは地方の4分の1にあたる）を有し、年間6百万ルーブル以上の取引高を誇っていた。564の葡萄酒醸造所うち500、148のビール醸造所のうち119、6338の製粉所のうち5700、がユダヤ人の所有であった。その他様々な工業施設のうち527、小売店のうち15000、酒類販売店のうち19000がユダヤ人のものであった。ユダヤ人が所有する全産業施設の生産高は、1年に7千万ルーブルに達した。その他、海外への木材及びパンの輸出業、国の請負業務、郵便局の運営などは、この地方のユダヤ人の独占であった²⁵。

原 注

- 1 1821, 1849, 1859, 1871年の反ユダヤ主義ポグロムは、偶発的な性格を帯びている。
- 2 周知のように、これらのポグロムは、中断を含みながら1884年の夏まで続いた。
- 3 統計データの選択と加工の担当者は、A. A. シロヴィムである。
- 4 第一巻の出版には、ヘブライ歴史民族誌学協会の協力があつた。本巻の出版は、この協会の尽力なしに行われた。
- 5 この巻とそれに続く巻についてであるが、著者は、第一巻の例にならって、それらが出版されたあかつきには、そこに収められている自分の論文には、『旧体制とユダヤ人ポグロム』という共通の表題を付けるつもりである。これらの論文において、著者は、概して、このポグロムの時代を呼び起こした原因だけではなく、ポグロムが起こった背景となる歴史的側面についても言及する予定である。これらの論文は、けっして完全さを目指したのではなく、ただ、後世の研究者が研究の目安としてくれるような基礎的な道標を据えるために著されたのである。
- 6 オルシャンスキー、И. Г.—『ロシアのユダヤ人：ロシ

アユダヤ人の経済的・社会的生活の概要』

- 7 A. コルニロフ、——『19世紀ロシア史』第2章、189頁、1918年。
- 8 オガノフスキー、『ロシア土地関係史概要』、445-51頁、1911年
- 9 ヤンソン、『農民の分与と支払いについて』、第2版、1881年、95頁。参照：A. コルニロフ、『19世紀のロシア史』、第3章、186頁。
- 10 ホーツキー、『土地と農業』、第2章、第2節。
- 11 B. アニシモフ、『分配』（『大改革』第6巻、スイチナ出版、1911年、92頁以降に掲載）。しかし、財政ハ報1900年第39号の、Д. И. リフチュラ『農奴解放前の土地利用と比較した西部地方の農民の土地分配について』のデータによれば、最後の3つの県における農民への分配地の拡大の実際の規模はかなり小さい。
- 12 A. B. ペシェホーノフ、『農奴解放時代の農民の経済状態』、『大改革』第4巻、スイチナ出版、1911年、229頁以降。
- 13 参照：M. H. ポクロフスキー、『19世紀ロシア史』、グラナタ出版、第7章以降。トゥガン・バラノフスキー、『ロシア輕工場』、第1巻、418頁以降。
- 14 本巻の最後にあるポグロム参加者等の構成に関する統計データを参照せよ。キエフの場合、202人のポグロムに参加した農民のうち、地方出身者は121人であり、84人の町人のうち地方出身者は42人であった。エリサヴェトグラードの場合、177人の農民のうち、地方出身者は105人で、181人の町人のうち112人が地方出身者であった。
- 15 B. ポクロフスキー、『収穫高及びパン価格の変動が人口の自然推移に与えた影響について』。論文集『収穫高及びパン価格の変動がロシアの国内産業の側面に与えた影響について』、第2巻、200-201頁、及び、240-369頁の表に収録。
- 16 本巻第2章、第31号、298頁を参照。
- 17 チャスラフスキー、『ロシア中央部におけるパンの売買』第1章及び第2章。参照：コルニロフ、前掲書、第3巻、156頁。
- 18 『20年（1874-1894年）のロシア刑事事件統計』。法務省機関誌第7号（1899年9月）、114、212頁などの付属文書。
- 19 Д. ドリーリ、1880年7月司法通報353頁の『刑事事件裁判欄』より。
- 20 同、353頁。
- 21 同、363頁。
- 22 同、367頁。
- 23 以下を参照。Г. クラスヌー＝アドモニ、『地下文書とポグロム』。『文学通報』1920年第2、3、4号に収録。
- 24 『19世紀ロシア史』、第6巻、69頁以降。
- 25 『1871年の南西部地方の行政を巡るさらに重要な緒問題に関する皇帝への短信』より引用。この引用文は、『ユダヤ人問題の報告に関して、貴族協会連合評議会事務局が作成した参考資料』第7部3-4頁に掲載されている。

分 析

資料の内容から以下のことが確認できる。

第一に、1881年ポグロムには、自然発生的な印象があつたと述べられている。「自然発生的な爆発」であるポグロムは、同時に国家保全のために利用された。以上の自然発生説と政府による画策説とが述べられている。

第二に、ポグロムの原因について、特に経済的面を

中心に分析されている。具体的には、1861年の農民解放令が、結果的には農民に土地不足という状況を与え、出稼ぎ労働者として農村から都市へと集中するようになった。しかし南ロシアの飢饉のためにパンの価格が上昇して生活に苦しむ農民や労働者は、都市において「飢えが招いた怖ろしい犯罪」に従事した。農民解放令とポグロムとの間に密接な関係があることは、「疑いもない事実として明らかにされつつある」と述

べられている。

第三に、ナロードニキ運動は、民衆の関心をひかずに、「経済的新時代」と呼ばれる急激な資本主義への移行期にあつてロシア民衆はユダヤ人資本家と出会うことになった。ユダヤ人はロシア経済に顕著な役割を果たしていた。ユダヤ人資本家に対するロシア人の敵意が推定される。

（2008年9月17日受理）